

## 中・高6ヶ年を見通した古典の教材編成 (その試行的実践4)

筑波大学附属駒場中・高等学校 国語科

石川 祐爾・鹽谷 健・鈴木 信好  
須藤 敬・関口 隆一・平田 知之  
福田 孝

筑波大学

石塚 修

## 中・高6ヶ年を見通した古典の教材編成

(その試行的実践4)

筑波大学付属駒場中・高等学校 国語科

石川 祐爾・鹽谷 健・鈴木 信好

須藤 敬・関口 隆一・平田 知之

福田 孝

筑波大学

石塚 修

### I はじめに

本校国語科では、学校の特色である中・高一貫校であることをどのように国語教育に生かせるかということを主眼として、プロジェクトを進めている。現在は、古典教材、主として古文教材の編成を検討している。これまで、「着物」「伝統建築」の呼称・「いろはガルト」「百人一首」の定着度・「季節感」の実態、といった「古典素養に関する調査」を予備調査として実施し、試行的授業実践として、入門期・定着期の授業比較、中学における『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』の授業実践、季節感を主体とした単元学習の授業実践などを報告、検討してきた。古典的素養を欠いた現代の生徒にどのように古典に親しませていくかを焦点としてその教材の開発・配列の考察に努めている。今年度は、一作品にこだわる古文入門期の授業実践と、今一度試みられた「季節感」を主題とした単元学習の授業実践と、について報告し、その検討を図ることとする。

以下がその報告である。研究授業は、本校、第22回教育研究会において実施されたものである。

### II 試行的授業の実践報告

#### (1) [中学一古典に親しむための『徒然草』の教材化]

(日時) 1995年11月17日(金) 第1校時

(授業者) 福田 孝

(授業クラス) 中学2年C組 男子40名

(研究テーマ) 中・高6ヶ年を見通した古典教材の編成

(教材) 『徒然草』(本文は学校図書教科書、創英社全対訳日本古典新書『徒然草』)

(教材設定の理由)

古典が生徒の日常生活から遠くなる中、多少とも古典への興味関心を持たせるための試みとして、従来より中学二年生で学習することの多い『徒然草』を扱い方を変えて、設定してみた。

『徒然草』は従来より中学二年生むけの教科書で扱われているケースが多い。内容が比較的身近であり、短い文章でまとまりがよく、彼らが高校時に学ぶはずの規範古典文法からあまりはずれないなど、中学時に古典に親しむ教材としては適切であるからであろう。しかし本来雑多な章段を含んでいるのに、中学用教材としては説話めいたおもしろいものを載せる場合が多く、読み込むには物足りないと思われる。従来から教科書で扱われている章段を用いながら、いくつかの章段を関連させて読解することと、様々な性質の章段を扱うこととにより、『徒然草』の多様な魅力に触れさせる授業案を考えてみた。ある程度難解でも人間の生き方に触れる思索的なものを読ませたりして筆者のものの見方・考え方に触れる、それによって古典の価値に気づかせ、古典に親しむ心を引き出せるのではないかと考えたわけである。『徒然草』を、A説話的な側面の強い章段、B人生訓的な側面の強い章段、C住まい方や風情に関わる章段、D初段や兼好自身に関わる章段と、大きく四つに分けて、その幅広い性質を理解させる単元学習的な設定とした。またCの部分では本校でここ数年行なっている季節感に関わる単元設定の下地づくりとしての側面も与えてみた。

(授業展開) 全11時

A

第1時 アンケート・下調べ用プリント 第一〇九段「高名の木登りといひし男」(学校図書所収)

『徒然草』についての基本的な知識事項についてのアンケートを行ない、生徒自身に『徒然草』の内容についてはあまり知らないことを自覚させる。また一週間の期限で図書館などで与えた調べ物をするように指示し、その作業を通じて生徒自身で『徒然草』がどういう性質の書物であるのかを理解させ、その上で授業に興味を持って向かわせるようにする。第一〇九段につき、一年生時にも行なった古文音読のことを思い出させ、声に出して読むことの重要性を指摘した上で音読をさせる(毎時とも)。読んで内容を確認した上で、兼好はどうして質問をしたのか・「なれども」という逆接を用いているのはなぜか、を考えさせることにより、本段の主眼を理解させる。

第2時 第九二段「ある人、弓いる事をならふに」

前時課題の下調べ用プリントを回収する。読んで内容を理解し、具体的なエピソードを仏道修行への意見に利用している展開を理解させる。前時に学習した第一〇九段を比較し、両段の「似ている点」「異なる点」を挙げさせ、人間心理の微妙な点を語る点で似、エピソードをエピソードとして紹介する体裁と、エピソードとして紹介して教訓に結びつける

点で異なる、といったことに気づかせ、それによって『徒然草』の多様性に気付かせる。

第3時 第五二段「仁和寺にある法師」(学校図書・光村図書所収)

「国語の資料」により地理的な紹介をし、「心うく」といった表現から法師の性格人柄を考えさせながら内容を確認し、この段のおかしみが何処から生じているのかを考えさせる。第一〇九段と同様に教訓めいた挿話であるが、教訓を語るためのものではなく、エピソードを語る点に主眼があることを理解させる。

第4時 第二三六段「丹波に出雲といふ所あり」(三省堂・東京書籍所収)

内容を確認し、「聖海上人」が「感涙」を流した理由、この話のおもしろさを考えさせる。またこれまで扱った章段のように詳しい語説明がついていなくても古語辞典などを引くことにより古文は十分理解できるものであることを理解させる。

B

第5時 第一一七段「友とするにわろき者」(三省堂所収)

「友とするにわろき者」として示されている判断がどういう考えに基づいているのかを考えさせる。また「よき友」もどういう考えに基づいているのかを考えさせ、「友とするにわろき者」との違いに気づかせ、『徒然草』の自由な書き方を理解させる。

第6時 第九三段「牛を売る者あり」

「買はんとする人」の「利」・「売らんとする人」の「損」を理解させ、「生ける間生を楽しまずして、死に臨みて死を恐れば、この理あるべからず」から「かたへなる者」の生に対する論理の進め方をきちんと理解させる。また周りの人が「嘲」った理由も考えさせる。第一一七段同様、今まで読んできた説話的な章段と異なり、こうした人生訓めいた章段もあることを確認させる。

C

第7時 第一一段「神無月のころ、栗栖野といふ所を過ぎて」(光村図書所収)

「つゆおとなふ物なし」の表現技法・「あられける」の「れ」の意味などに注意させる。「この木なからましかば」という言い方と、「この囲ひなからましかば」という言い方の差異に気づかせ、問題の根本は何なのかを考えさせる。兼好はこの庵の主の住み方を肯定しているのか否定しているのかを考えさせることにより、この章段の主眼は、庵の主の住み方を肯定しようとするものなのか、その物欲を非難しているものなのかを考えさせる。

第8時 第四三段「春の暮つた、のどやかに艶なる空に」

全体が二文からなる章段であることから一文目の特異な点を理解させ、一文の構成として大きくどのように区切ることが出来るのかを考えさせる。「国語の資料」により「格子」「妻戸」「御簾」などを理解させる。末尾の一文「いかなる人なりけん、たづねきかまほし」というのがあるのはなぜなのかを考えさせ、そこから先回読んだ第一一段との共通性を理解させる。

第9時（本時） 「九月二十日のころ」（教育出版所収）

敬語などから人間関係を把握させ、どういう際のどういう経験を書き付けたものなのかを理解させ、なぜ「やがてかけこもらましかば、くちをしからまし」なのかを考えさせる。その上で前時まで読んできた第一一段・第四三段と共通する点を考えさせる。

D

第10時 初段「つれづれなるままに」（学校図書・東京書籍・三省堂所収）

第二四三段「八つになりし年」（東京書籍所収）

初段を扱いながら、生徒に課題としていたプリントの内容をとりまとめると同時に十時間通して来た全体のまとめを行なう。また第二四三段を読んで、兼好法師の幼いときからの論理癖を知り、第九二段「ある人、弓いる事をならふに」・第九三段「牛を売る者あり」など似た論理の展開のさせ方に気付かせる。

第11時

10時間通して読んできたアンケート・感想を書かせる。

（指導の目標）

- 一 古典に触れて昔の人の考え方などを読み取り、わが国の伝統について理解し、興味を持つ。
- 二 古文の文章に読み慣れ、基礎的な読解力や鑑賞力を身につける。
- 三 古語の特徴を知り、現代語に通じる側面に興味を持つ。

（本時の計画）

- A. 目標
- 一 「九月二十日のころ」を読解して、そこに描かれている内容を把握する。
  - 二 「九月二十日のころ」において兼好法師が感心した点を把握する。
  - 三 歴史的仮名遣いを理解し、正確に音読できるようにする。

B. 展開

①本文朗読

- ・前時に読んだ第四三段の内容を思い出させた上で、本時では再び似た雰囲気の章段を読み進めることを伝え、「九月二十日のころ」本文を音読させる。

②内容把握

- （a）訳を配布して、内容をまとめ、どういうことがあったのかを理解する。
- ・「ある人」と兼好法師の関係を理解させる。
- ・「明くるまで月見る」とはどういうことかを『国語の資料』で確認する。
- ・「いとものあはれなり」はどうしてかを考えさせる。

（以上の際に、敬語、「荒れたる庭」「わざとならぬ」「しめやかに」「忍びたる」といった語にも注目させる。）

(b) この段の主眼となる部分を理解させる。

- ・「やがてかけこもらましかば、くちをしからまし」とはなぜなのかを考える。
- ・「跡まで見る人あり」とはどういうことかを考えさせる。

(理由としては「月を見るため」が考えられるが、「客の跡を見送るため」という答えも可能性としては考えられる。「月見るけしきなり」という表現や「かやうの事」の指示内容や前半の情景描写から考えさせる。)

(c) 前に学習した第十一段・第四十三段と本段との類似点を考える。

- ・各人に思ったことを発表させる。

(どの章段も、兼好法師の体験談である・まず時の提示がある・高貴であるが飾り立てた家ではない、むしろ粗末である・物に対する執着が薄い、など。)

- ・本段と他の二段とは住まい方を述べる点、心がけを述べる点では大きく差があることには留意する。
- ・第十段の内容を現代語訳などで紹介し、理解の補助とする。

### ③まとめ

- ・三つの段に共通する兼好法師の趣味は日本の生活感覚の中では大切なものであることを口頭で伝える。

(資料)

宮腰賢編『国語の資料』 正進社

(参考文献)

佐伯梅友校注	『徒然草』	全対訳日本古典新書	創英社
安良岡康作校注	『徒然草全注釈』	日本古典評釈全注釈叢書	角川書店
永積安明校注	『徒然草ほか』	新編日本古典文学全集	小学館
西尾実校注	『徒然草』	日本古典文学大系	岩波書店

(今回の試みについての検討)

まず第十一時に実施したアンケートの結果を載せる。

1, 2 について

	おもしろい	つまらない
ア第一〇九段「高名の本登りといひし男」	9	0
イ第九二段「ある人、弓いる事をならふに」	20	5
ウ第五二段「仁和寺にある法師」	16	4
エ第二三六段「丹波に出雲といふ所あり」	15	4

オ第一一七段「友とするにわろき者」	14	29
カ第九三段「牛を売る者あり」	11	19
キ第一一段「神無月のころ、栗栖野といふ所を過ぎて」	3	5
ク第四三段「春の暮つかた、のどやかに艶なる空に」	2	12
ケ第三十二段「九月二十日のころ」	5	4
コ序段「つれづれなるままに」	1	17
サ第二四三段「八つになりし年」	20	15

生徒の感想から判断すると、全授業計画中Aとしたアからエまでに対しては現代と共通する教訓や話の意外性によって興味を引かれており、内容がすぐ分かるという点でも親しみが持て反感を覚えることが少ないようである。それに対して、Bとしたオカは、文意の取りやすいオは内容に展開がなく、兼好の志向に合致するかどうかで好悪が分かれ、文意の取りにくいカについてはその難解さを乗り越えられなければ嫌悪を覚えるし、乗り越えた生徒には知的興味をかき立てられる内容を保持しているようである。Cとしたクケは、親しみが無い内容のせいか、やはり戸惑っている。およそ生徒には興味の無い風流だとか住まい方だとか扱われているためであろう。Dとしたコケについては、コは執筆動機といったものであるため有名なわりにとりつきにくいようであり、サは他に学習した章段内容と関連させて兼好の論理的性向に興味を抱けた者は好むようであり、そうでなければ自慢話、詰まらぬ議論としか見られないようである。

またアンケートの4については

ア 音読すること	17
イ 訳すること	19
ウ 現代語と異なる言い方に触れられること	54
エ 有名な作品の一部に触れられること	22
オ 昔の人の考え方に触れられること	70

と答えている。Aを好むところから窺えるように、現代に共通する考え方には容易に反応でき好むのに対して、実は生徒自身が興味を持っているはずの「昔の人の考え方に触れられること」については、Cのように興味を抱けていないのが実情である。我々教師の側は、入り口として生徒の側からとりつきやすい教材を準備してやる一方で、実はこうした教材を読み理解することも重要であるという具合に、難解ではあっても拒否反応が出ないように、理解しづらいものではあっても実は古人の考え方を代表する感じ方であることを、接しやすく分かり易く提示してやる必要があるように思われる。

今回の試みは、『徒然草』にこだわってその多くの章段を提示し、『徒然草』の多面性に触れさせる方向を取ったが、これほど多くの時間を古文に向けて確保出来ない場合にも『徒然草』の面白さを享受させるにはここで試みたような区分を目安としながら精選して教材を示すことは出来

るように思われるし、そうしないでAのような教訓めいた章段だけを扱って『徒然草』を『徒然草』として生徒の前に提示したことにはならないだろう。いえばAのような章段を提示して親しみを持たせると同時に、BCのような章段を扱って古文独自の持つ価値観・感じ方に触れさせる必要はどうしてもあるのだろうと思われる。

## (2) [高校一季節感を喚起する古典の学習指導]

(日時) 平成7年11月17日 第2時限(25時間中の第18時)

(担当者) 石塚 修

(指導対象) 筑波大学附属駒場高等学校 2年1組 男子 41名

(研究テーマ) 中・高6ヶ年を見通した古典教材の編成

(単元名) 「花は盛りに」 徒然草 吉田兼好

### 1 はじめに

現在、高校生の「古典離れ」や「古典嫌い」が古典教育の現場で叫ばれて久しい。しかし、印象批評的なとらえ方が多く、その実態については、細かく検討されていないのが実情ではなかろうか。一概に、「大好きか」「好きか」「少し嫌いか」「大嫌いか」というような漠然とした問い掛けでは、生徒が「古典」に抱く実際の意識をつかむことは難しいのではないかと思う。

いったい、現在の生徒たちの古典に対する意識はどのようなものであり、古典を受けとめる側としての実態はどのようなものであるのか。そして、その実態に対しては、どのような授業を実践することによって対応してゆけばよいだろうか。ここでは、生徒のおかれた実態をふまえつつ、古文において「季節」と「景物」を中心にすえた授業を実践していくことで、彼らの古文に対する認識を多少なりとも変革できるような授業の展開を考えてゆきたい。

### 2 現代とつながる感覚を求めて

生徒の古典に対する考え方を、本校国語科で実施した「中・高6ヶ年を見通した古典の教材編成 予備的調査1～3」の結果から見てみると、古典の学習の目的・意義として、

ア、われわれの祖先の生き方・考え方を知って、われわれ自身の生き方・考え方に役立てる

と回答した者が、1977年には、中学55%・高校41%であったものが、1991年には、中学33%・高校30%へと減少している。このことは生徒がもはや古典の世界を自分たちの生活とつながるものとして考えていないことを示しているといえよう。また、



イ、昔の人々の生き方・考え方と、現代の人々の生き方・考え方の違いを知る。

と答えた者も、1977年には、中学42%・高校28%であったものが、1991年には、中学28%・高校28%へと中学生において変化しているのである。

「古典教育」の意義としては、増淵恒吉のように祖先の生きざまを読み取って、我々の生活・考え方に照らし合わせ、心の糧としての生活を豊かにしていくことであるとする、現代につながる世界を生徒に考えさせてゆこうとする立場と、時枝誠記のように「古典教育の意義は、むしろ、現代にないものを求めるところにあるというべきである」とする二つの立場がある（1）。しかし、先のデータを見てみると、もはやこのどちらの立場も生徒の中には存在していないのではないかと思われる。生徒は、「古典」が「現代」に「つながる」「つながらない」の認識自体がすでに欠如している状況の中で、古典の授業を受けているのが実情なのではないだろうか。

そのことは、例えば、先の調査に継続して実施した「古典学習の前提となる素養調査」・「古典学習の前提となる素養調査」・「古典学習の前提となる素養調査『小倉百人一首』」を見てもよくわかる。「軒」を認知できる生徒は、中学53%・高校60%であり、着物の部位についても、「袖」に90%の正解があったものの、その他については、ほとんど識別が出来ない実態がある。『小倉百人一首』にしても阿部仲麿の「天の原」のみが50%以上の生徒の記憶のなかにあるにすぎないなど、「古典」の理解の前提として教師の側が考えている情報が、生徒の側にはほとんど存在しないという実態が見えてくるのである。

それでは、このような生徒の「古文」からかけはなれてしまった実態をふまえた時、古典の授業はどのような方向で考えてゆくべきなのであろうか。古典的な常識をまったく前提としないすむような教材で授業をすすめてゆくか、教材に出てくるような古典常識を、きめこまかく授業で扱ってゆくか、その二つの方向が考えられよう。前者では、教材としての魅力が乏しくなるという問題が出てくるだろうし、後者では、言語の教育というより文化の教育になってしまう危険性が生じてくると考えられる。そのそれぞれがはらむ危険性をできるだけ回避する形での授業の展開はありえないものなのだろうか。

生徒たちの現実の生活に乏しくなったとはいえ、「古文」の世界と共通する認識を得られる要素はないものだろうか。それを考えたとき「季節感」の存在を想定することができよう。たとえば、本校における「古典学習の前提となる素養調査『古今集』による季題」を見てみると、松田武夫『新釈古今和歌集』で56項目に分類されている四季の歌題（2）中で、50%以上の生徒が季節を特定できるものとしては、次の項目が挙げられる。

「桜」「解氷」「雪」「月」「薄　すすき」「紅葉　もみぢ」「鶯」「鹿」「氷」

「若葉」「霞」「梅」

以上の12項目は少なくとも生徒の中に、何らかの季節との結びつきをもっている景物ということ

になろう。この数値をはたして多いとするかどうかはそれぞれ見解のあるところとは思われる。しかし、先程述べたように、もはや古典の世界へのつながりを意識しなくなっている生徒たちにとって、こうした景物と季節とが結びついて受け入れられていることは、注目すべきであろう。同様のことは、森本真幸の「季節の認識を啓く『春はあけぼの』」(3)で紹介された生徒たちの「春はあけぼの」でとりあげられた景物とその季節の結びつきに共感できたかどうかの調査でも、「夏の雨」「冬の朝」「火桶の火」「からす」「かり」に共感できないとする者がいたものの、多くは「蛩」を筆頭として自己の理解の範疇として認めているという事実からも指摘できる。

そこで、今回は生徒のなかにほとんどなくなったとはいえ、辛うじて残っているであろう季節感と古典における季節感との接点を考えさせることで、生徒の「古文」への興味と関心を喚起してゆく授業を試行したのである。

### 3 授業の実際

以上のような調査結果をふまえて、どのような授業展開が可能となるのか、高校2年生を対象とした授業の構成を考えてみた。以下がその展開である。

#### ① 単元計画

『万葉集』	第一時	「うたの発生」	《伝説の時代》	雄略天皇	◎箆もよみ箆もち
	第二時	「天皇と和歌」	《言霊の時代》	舒明天皇	大和には群山あれど
	第三時	「宴席と和歌」	《個性の時代》	額田王	冬ごもり春さり来れば 熟田津に船乗りせむと

#### ※春秋優劣論について そのI

第四時	「悲劇の皇子」	大伯皇女	◎我が背子を大和へ遣ると ふたり行けど行き過ぎかたき
		大津皇子	ももづたふ磐余の池に
		大伯皇女	うつそみの人にある我れや 磯の上に生ふる馬酔木を

#### 『古今和歌集』

第五時	「やまと歌」	『古今和歌集』仮名序の意義について
第六時	「四季の部立て」	『古今和歌集』の時間意識と編集意識について
	春 上	在原元方 年の内に春は来にけり 紀 貫之 袖ひちてむすびし水の ◎青柳の糸よりかくる
	春 下	凡河内躬恒 今日のみと春を思はぬ

夏 読み人しらず 我が宿の池の藤波  
紀 利貞 あはれてふことをあまたに

『枕草子』

- 第七時 ◎「雪のいと高う降りたるを」(教育実習)  
第八・九時 「二月つごもりのころに」 (教育実習)  
第十時 「宮廷生活と和歌」清少納言と和歌について (教育実習)  
第十一時 「春はあけぼの」 全体の構造の把握  
十二時 「春はあけぼの」 景物の特徴  
『古今和歌集』(詠歌対象)と比較して  
十三時 「春はあけぼの」 景物の特徴  
『更級日記』(資通の春秋論)と比較して  
※春秋優劣論について そのⅡ

『新古今和歌集』

- 第十四時 「新」『古今和歌集』編纂の意識  
春 上 後鳥羽上皇 ほのぼのと春こそ空に来にけらし  
見渡せば山もと霞む水無瀬川  
※春秋優劣論について そのⅢ  
第十五時 秋 上 寂蓮 ◎寂しさはその色としもなかりけり  
西行 心なき身にもあはれは知られけり  
藤原定家 見わたせば花も紅葉もなかりけり  
第十六時 「本歌取りの世界」  
秋 下 式子内親王◎桐の葉も踏み分けがたくなりけり  
「草庵の文学」  
冬 西行 ◎寂しさに堪へたる人のまたもあれな

『徒然草』

- 第十七時 ◎「つれづれなるままに」 兼好法師の個性・『枕草子』と比較して  
※ 第十八時 「花は盛りに」 月・花の趣向と見方  
十九時 祭りの見方と趣向  
二十時 無常観と自然

「古典の季節・私の季節」 作文・発表

第二十一・二十二

◎は使用教科書「明治書院精選古典Ⅰ」所載のもの

② 単元の目標

ア、言語を通じて、伝統文化への理解を深めさせ、古典への関心を高めさせる。  
 イ、自己の言語生活が、歴史的背景を継承していることへの認識を深めさせる。  
 ウ、古典作品における表現が、現在の言語表現につながっていることを理解させる。

### ③ 本時の指導案

#### 一 目標

- 一、「花は盛りに」を読解しつつ、兼好の季節感を理解し、その個性を考える。
- 二、「花は盛りに」の表現の特色を理解し、その効果について理解する。
- 三、「花は盛りに」にみられる自然鑑賞の態度が、どのような文化的背景によるものかを考える。

#### 二 学習指導過程

	時間	学 習 活 動	指 導 内 容	指 導 上 の 留 意 点
導 入	10 分	前時の復習をする。  「花は盛りに」全文を音読する。	前回の授業の内容を簡単に説明する。  教師の音読にそって、大切と思われる部分を、生徒自身に指摘させる。	「をりふしの移り変はるこそ」と「花は盛りに」とが、どのような点で共通しているかを考えさせる。 前時の終りに、予め自宅で音読していくよう指示しておく。 各自で筆記用具を持ち、自然鑑賞の仕方として、特徴的な部分についてチェックさせる。
展 開	30 分	兼好の自然鑑賞の態度がよく出ている部分について指摘する。  兼好の自然鑑賞に対する考え方について理解する。	本文をそのまま抜き出して答えさせる。 反語表現についても説明する。  「かたくななる人」「よき人」の鑑賞態度の違いについて指摘させる。	「花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものかは。」 「よろづのことも、始め終はりこそをかしけれ。」 「望月のくまなきを千里の外まで眺めたるよりも、」 「すべて、月・花をば、さのみ目にて見るものかは。」  「この枝、かの枝散りにけり。今は見どころなし。」 「ひとへに好けるさまにも見えず、興ずるさまもなほざりなり。」 「片田舎の人こそ、色こく、よろづはもて興ずれ。」 「よろづの物、よそながら見ることなし。」
		兼好の鑑賞態度は、何に原因するものか、「をりふしの移り変はるこそ」と比	「花」「月」の鑑賞の仕方を中心として比較させる。	「花もやうやう色気だつほどこそあれ、…よろづに心をのみぞ悩ます。」

		較して考える。	景物そのものよりも、その変化に関心の中心が置かれていることを指摘させる。	「すさまじきものにして見る人もなき月の、寒けく澄める二十日余りの空こそ、心細きものなかれ。」 「をりふしの移り変はるこそ、ものごとにあはれなれ。」の強調表現にも注意させる。
整理	10分	兼好の鑑賞態度について、これまで学習してきた古典文学作品との違いを考え、兼好の個性を理解する。  次で学習する部分「祭りの見方」や「無常のかたき」につなげることも説明しておく。	即物的鑑賞から離れていくことが、何を意味するのかを考えさせ、兼好の自然観が、人生観にも通じていくことを理解させる。	単なる「世捨て人」としての穿った物の見方ではなく、思想的に深まりを見せていることに気付かせる。 思考によって作り上げられた世界を、鑑賞していこうとする姿勢が、これまでの自然鑑賞の在り方とどういう点で特徴的か考えさせる。

### 三 指導準備

プリント「をりふしの移り変はるこそ」「花は盛りに」

改訂版『高校生の古典文法』塚原鉄雄監修 京都書房

### 4 まとめ

これまでの実践例の問題点を考えたとき、現代社会の生活感と古典との結びつきについての意識が希薄ではないかといえるものが多い。それはもちろん古典に何を求めていくかということと大きくつながっている問題であるといえよう。現代とつながった世界を求めていくのか、現代と隔絶した世界を求めていくのかによって、現在の生徒のおかれている社会と関連づけて授業を展開していくか、まったくそうした配慮をせずに授業をしていくかのどちらかの実践になってしまうのは必然といえるのかもしれない。しかし、この二つの方向は、けっして相容れないものではないと考える。やはり古典教育は伝統文化の継承を無視しては成立しないだろうし、かといって言語としての要素を無視することもできない。言葉から伝統的文化の側面をうまく切り取って生徒の前に示してやるのが、教師の大切な使命であるとも言えよう。そのためには、生徒自身が現在おかれている環境のなかに古典の世界の片鱗があることに気付かせることも学習へ導く大切な要素であるといえよう。以下に、それに関する生徒の感想を引用する。

古文の授業では自分の季節感を、たとえば兼好の季節感と比較することで意識化することができた。意識化された自分の日本人的性格は世界に出ていき、様々な文化に洗われ、多様性の海の中で自己を失いそうになった時に、私に確固とした安心感を与えてくれるものであると思う。

2-2 北川剛史

個人的な興味としては、このような普段当たり前だと思っていたことが、実はある過程を経て今ようになったということを知ったことがおもしろかった。

2-3 吉川 真

はっきり言って古文は馬鹿にしていたが、読んでみると1000年前の日本人の美意識（幽玄美など？）が今の我々に通じているのだな、と感じられたことは勉強になった。

2-4 小宮山尚樹

さらに、今回の単元の指導では、散文と韻文との関連について系統的に指導していく必要性ということも考慮した。それは、教材の配列について古典でも教材の難易からはなれ、主題単元学習の発想が必要なのではないかと考えたからである。ジャンル・時代にとらわれることなく教材編成をおこない、むしろ「季節」に応じた教材編成を試みるべきではないかと考えたからである。とくに和歌教材については、同じ歌集であっても四季に分けて、生徒が実感しやすい時期に配置して授業をするようにしたのである。そして、全体としては『万葉集』における「うた」の発生から、『枕草子』における「個性」の展開まで、「韻文」と「散文」との関連をおさえつつ古典を理解することで、言語生活をより深く理解させられるよう教材の編成を試みたのである。

今後の課題としては、生徒自身が、より自ら学び取れるような学習方法の工夫が必要であると考えられる。たとえば、「作文」の相互批評や発表、「春秋優劣論」でのディベートなどの可能性も探っていくべきであろう。また、個々の教材の精選がさらに必要であると考え。特に、「和歌」の選定においては、なるべく教科書所載のものを生かそうとしたための限界があったかもしれない。同様に『枕草子』の章段についてもさらに検討の余地があるかと思う。

最後に、生徒のこの単元の授業後の感想を参考として示しておく。

「古文の授業を受けて 日本人の季節感をどうとらえたか」

今の日本人というのは、基本的に夏が一番好きだと思う。例えば「燃えるような恋をするのは夏だし、自由な時間が一番多いのも夏だからです。しかし、古文の授業を受けて、昔の人はそうでないことがわかりました。昔の人は春と秋にさまざまなものを見つけていたのです。春は生命の象徴です。これは草木が芽生えることからわかります。これに対して、秋は物事の終わりの象徴です。夏というのは、この春から秋に至るまでの段階、冬というのは秋から春に至るまでの段階でしかないのです。今の人は春を生命の象徴ととらえているのでしょうか。僕はそうは思いません。むしろ、夏に至るまでの段階ととらえているのではないのでしょうか。

春と秋にはたくさんの景物があります。しかし、今の人は昔の人ほどそのことに関心がないように思われます。

2-4 阿部利幸

季節というものは「四季」という言葉で表わされる通り、春夏秋冬の四つに、はっきりと区別され、当時の人々にとらえられていたようだ。そして、季節ごとに「景物」があり、その景物を見れば、人々は季節を想い、季節を意識する時、同時にその景物をも想っていたようである。

ただ、当時は「四季」という四つのはっきりとした区別のもと、春なら春、秋なら秋のみを、他の季節とまるっきり別のものとしてとらえていたわけではないのである。つまり、たとえ季節は春であっても、人々はつねに過ぎ去った冬、そしてやってくる秋を意識したのである。そこに「季節同士のつながり」→「季節のうつりかわりを重視する姿勢」が生まれたのだ。かくして、この相反するかに見える二つ、「四季の区別」と「季節のうつりかわり」を、当時の人々は同時に意識していたのだ。

というようなことを古典の授業をうけて、ぼんやりと感じました。 2-4 平井秀幸

今までの僕にとっての季節感といえば、次のような感じだった。

春…桜の花が咲く、花粉がいやだ、ねむい。

夏…じめじめしていていやだ。

秋…好物の秋刀魚がうまい。けっこうすごしやすい。

冬…寒い、東京くらいでは雪が降るのもさほど苦しくなく楽しい。

といったようなものだ。

ところで、授業を通して僕がもっていたような季節感、つまり、各季節一つ一つの特徴をとらえるというような感じ方は、実は万葉集の歌にでもよまれているような文学史上では（少なくとも正岡登場以前で）古い感じ方であるということだった。

つまり時代が下れば、古今・新古今をはじめとして、季節の変わり目のあいまいな時期が好まれて詠まれているということなのだが、このようなとらえ方は僕にとって目新しいものといえる。現実としては冬は寒かったが気がついたらもう梅が咲いていたなどということもまれでなく、新聞の四コママンガで季節についていっているような日々を送っている。このような外に開かれていない生活が細かい季節の変動を見おとす原因になっているのだろう。

この日本文化をはぐくんできた日本の季節は変化に富むことで有名である。このような日本の中にいるのだから、日本文化の理解は少しでも深めるために、季節の細やかな変化に気を配ってみるのも悪くないと思った。

2-4 新田 尚

高校生になると、時が経つのが速くなって来た。それと同時に身の周りの景色の移りかわりに敏感になってきたことを、この頃強く感じる。小学生や中学生の頃、人がつくったものには

よく関心を示すが、自然の生む美しさにはあまり目を向けようとしなかったことを考えると我ながら良い傾向だな、などと思う。

こんなふうに成長できたことの一つの要因に高一からの古典学習があったと思う。漢文の詩をつくる課題に頭を悩ませているうちに自から自然に興味を持つようになった。そして古文の授業では日本人の季節観について多くを学んだ。今までそんなことを考えたことがなかったのが新鮮だった。

日本人は季節を季節単独でとらえるのではなく、死のとらえ方、人生のとらえ方、より身近な日常生活などに結びつけてとらえていたのだと思う。それは、ほくは今まであまり気にしていなかったが、現代日本人にも脈々と流れている考え方だった。

2 - 4 長坂 強

#### 注

- 1 安西廸夫「古典学習の意義」『古典（古文）教育の理論と実際』大空社 平成7・3 pp.18  
～21
- 2 松田武夫『古今集の構造に関する研究』 風間書房 昭和40・9
- 3 森本真幸「季節の認識を啓く『春はあけぼの』」『日本文学』第33巻8号 1984・8 pp.51  
～62



中学二年 古文 『徒然草』 予備調査

次の各項目について答えなさい。

1 『徒然草』をなんと読みますか。

2 a 『徒然草』を現代語訳などで読んだことがありますか。

はい  
いいえ

b aで「はい」と答えた人はどうして読んでみようと思いましたか。

3 『徒然草』はどのような内容の書物だと思いますか、思うところを書きなさい。

4 『徒然草』の題名の由来を知っていれば書きなさい。

5 『徒然草』の作者名を記しなさい。

6 『徒然草』はいつ頃書かれた書物ですか。

7 『徒然草』はどのようなジャンルの作品ですか。

中学二年 古文 『徒然草』下調べ用プリント

( ) 組 ( ) 番 ( )

次の各項目について分らないものは調べて答えなさい。

1 『徒然草』の題名の由来を書きなさい。またこの題名は誰が付けたものか、分かれば書きなさい。

2 『徒然草』の作者とされている人物名を記し、なぜその人物がこの書物の作者とされているのか、書きなさい。

3 『徒然草』はいつ頃書かれた書物であるということになっていますか。

4 『徒然草』はいくつの章段からなり、どのような内容の書物であるかを、調べて書き出しなさい。

5 『徒然草』は随筆というジャンルに属すると言われていますが、このジャンルはどういう性質を持つと言われていますか、書きなさい。

『徒然草』授業後アンケート ( ) 組 ( ) 番 ( )  
二学期にはいつて長い時間をかけて『徒然草』のいくつかの章段を読んできましたが、次の質問に答えなさい。

1 授業で触れた中でどの章段が一番おもしろいと感じましたか。章段の上の記号で答え、その理由を書き出しなさい。

ア 第一〇九段「高名の本登りといひし男」

イ 第九二段「ある人、弓いる事をならふに」

ウ 第五二段「仁和寺にある法師」

エ 第三六段「丹波に出雲といふ所あり」

オ 第一七段「友とするにわろき者」

カ 第九三段「牛を売る者あり」

キ 第一一段「神無月のころ、栗栖野といふ所を過ぎて」

ク 第四三段「春の暮つかた、のどやかに艶なる空に」

ケ 第三二段「九月二十日のころ」

コ 序段「つれづれなるままに」

サ 第二四三段「八つになりし年」

〔記号〕 ( )

〔理由〕

3 授業の中でおもしろいと感じたことはどのようなことですか。何でもいいから書き出しなさい。

4 古文の授業の中でどのような部分に興味を持ちますか。該当するものに丸を付けなさい。

ア 音読すること イ 訳すること

ウ 現代語と異なる言い方に触れられること

エ 有名な作品の一部に触れられること

オ 昔の人の考え方に触れられること

カ その他 ( )

5 現代語訳はあった方がよいですか、どうですか。思うところを述べなさい。

2 授業で触れた中でどの章段が一番つまらないと感じましたか。前問の章段上の記号で答え、その理由を書き出しなさい。

〔記号〕 ( )

〔理由〕

6 今まで授業で取り上げた作品以外で、どのような作品を読みたいと思いますか。(ジャンル・作品名など)

### Ⅲ おわりに

われわれが実施してきた「古典学習の素養となる予備調査」によると、現在の生徒には古典的素養が大きく失われていると判断される。その生徒にどのように教材を考え与えていくかは大変難しいように思われ、教科書に載っているからという理由だけで古典教材を与えるのでは、もはや生徒の知的興味を引き付ける古典の授業を開発していくことは出来ないと思われる。かれらの実態に対して、どのような教材をどのように配列して指導して行くべきかは今後大いに開発検討して行かなくてはならない。今回の実践もその一つの試みであった。これらが即座に古典の授業としてどの教育現場でも通用するものであるとは思っていない。しかし『徒然草』の各章段がどのように生徒たちに受けとめられるのかの検討材料とはなり得ていようし、現代と古典の世界との接点となりうる季節感を要としながら、様々な作品が扱われる可能性があることを示し得ていよう。

次年度の試行実践によって中学一年から高校三年までの試行的実践は完了することになる。それによって中高六カ年を通しての古典教材のあり方を（とくに高校では新カリキュラムに対応させつつ）まとめていく予定である。